

空白

第13期 西森 康斗

なんとなく、不安があった。自身の内に広がった空白に対する不安だ。自分は空っぽで、何者でもない、代替可能な存在のような気がしていた。自信を持てなかった。そんな鬱々とした日々の中で、私は、小野ゼミと出会った。その時私には、一筋の光明が見えた気がした。説明会で目にした先輩の姿は、キラキラとしていた。自信に満ちて堂々としていた。その姿に、自身の現状を打ち破るような何かがあると感じたのだ。そう感じた私は、小野ゼミに志願し、小野ゼミでの生活が始まった。小野ゼミ1年目、ディベートや論文執筆といったチームでの活動を通じて、複数人が同じ目標に対して、熱意を持って一丸となり向かっていくことの楽しさを知った。また、活動に真剣に取り組むことによって、自身の得手不得手についての理解を深めることができた。さらに、共に活動する仲間の考え方や行動を見ることによって、自分とは異なる思考や価値観についての理解も深めることもできた。ただ漫然と過ごしていた日々とはまるで違い、多くの学びが存在する刺激的な生活を送る中で、漠然とした不安は薄れていった。しかし、小野ゼミ2年目を迎えて、自身が抱える欠点と正面から向き合うことになった。それは、面倒だ、できるかわからないと、物事の開始を先延ばしにする癖だ。やるかやらないか、ただその選択があるだけなのに、あれやこれやと口実を付けては、決断を後回しにする。その停滞の繰り返しは、自身の内に広大な空白として沈殿していた。そんな自分を本気で変えようと決意したきっかけが、卒論執筆序盤での失態だった。提出期限を守らず、多くの人に多大なる迷惑をかけた。その時、自分が不甲斐なくて、どうしても変わりたいと心の底から思った。そこから心機一転し、自身を見つめ直してきた。正直なところ、その他にもまだまだ改善すべき点は多々存在する。しかし、確実に前進していると思える。私は、劇的ではないが確かな変化を、小野ゼミの2年間で1つ1つ積み重ねてきた。そして、その積み重ねが自信となり、今の自分をしっかりと支えている。それら変化の機会を与えてくれたのは、楽しい時や苦しい時を共に過ごして濃い時間を共有した同期であり、大学院生、先輩方、後輩たちであり、そして何より、不甲斐ない自分を見捨てることなく最後まで指導してくださった小野先生である。深く、感謝しております。

空白は、今でも私の内に広がっている。しかし、それは、空虚であること、無価値であることを意味するのではない。それは、自身が目指す未来の実現のために現在の自分を変革していく、そのための余裕であり、伸び代が存在することを意味するのだ。そのように、私の考え方は変わった。変えたのは、小野ゼミで培った経験と、それを根拠とした自信だ。いつかまた、不安を感じることもあるかもしれない。その度に私は、小野ゼミで培った経験を思い出すだろう。そして、その中で得た多くのものを自信に変えて、私は、目指す未来へと進んで行く。